

「また来てね」嬉しかった子供の笑顔

グループ わ が初めて派遣した東北被災地支援チームは、活動を通じて現地の惨状を体験、被災者の声を聞くことができました。5日間の行動をざっと振り返ってみました。（写真は迫児童館で）

支援物資を満載して現地へ

7月18日早朝、4台の車に物資を満載してシルバーカレッジを出発。名神～北陸～磐越～東北のルートで同夜、宮城県大崎市へ。

19日朝、「NPO田んぼ」で物資を降ろし、2班に分かれてボランティア活動を開始しました。田んぼ修復班の9人は南三陸町入谷の棚田でガレキ除去作業。昔遊び班7人は、登米市米山児童館（40人）と中田児童館（60人）で約2時間ずつ公演。プログラムは南京玉すだれ・紙芝居・昔遊び・動物風船・歌。最後に神戸の子供たちからのメッセージとボール・おもちゃなどのプレゼントを渡しました。「子供たちの表情もだんだんほぐれ、明るい笑顔に変わった。うれしかったですね」と大澤さんもニコニコ顔。



丸太と格闘、2反の瓦礫処理

21日は曇天で涼しい朝。田んぼ班は入谷地区で作業を続行し、丸太や畳と格闘。19日と合わせ計2反ほどのガレキ処理を終えました。「アルバムや学校の帳簿類がヘドロに埋まっており、掘り出すのがつらい」と内村さんは悲しそうでした。作業は午前中で切り上げ、昔遊び班と合流して昼食。午後は宮城学院女子大の佐藤幸也先生（岩淵氏の友人）の案内で南三陸町と石巻の被災地を見学しました。高台から見下ろす南三陸町は、見渡す限りガレキの山。ところどころに、鉄骨だけになったビルが無残な姿をさらしています。防災センターもその一つ。「早く逃げて」と防災無線で叫び続けた女性がいた建物です。祭壇に花を供え、手を合わせる人が絶えません。

廃墟の校舎…涙とまらず

70人を超す子供たちが犠牲になった大川小学校。道路脇の祭壇には花や玩具・飲み物・本が供えられ、廃墟と化した2階建ての校舎を眺めるチームの皆さんの目からは涙があふれていました。周辺には今でもわが子を探す肉親が訪れているそうです。

22日は早朝、大崎市の宿舎を出発。往路と同じルートで深夜に神戸・シルバーカレッジ帰着しました。18～21日の宿舎は、大崎市内のホテルなどを確保することができましたが、避難者・ボランティア・長期出張者で込んでおり、3か所を転々となりました。

道満団長は「わずかな期間だったが、現地でお手伝いができて、行った甲斐があった。オールKSCの絆を深めることもできた」と満足そうでした。

昔遊びと音楽チーム合同公演

20日は、台風6号の余波で大雨の予報。ガレキ作業は中止となり、田んぼ班は昔遊び班に合流したり、気仙沼方面へ見学に出かけたりしました。昔遊び班は午前中、大崎市大貫小学校（60人）で昨日と同じようなプログラムで公演。

午後は、登米市迫児童館（70人）で福祉振興協会の音楽チームと合同公演となりました。音楽チームは子供たちと歌ったり、踊ったり、にぎやかです。お次は、昔遊びの出番。子供たちも、保母さんも熱心にアヤトリやブン

ブンゴマを習っていましたが、公演が長引いたため会場はだれ気味。盛りだくさんなプログラムが終わった夕方6時には、子供たちも20人くらいに減っていました。



【第1次支援チームメンバー】

1班（田んぼ）= 内村ナナ子、平林啓子、水嶋和信、清野清、小澤輝彦、片岡隆夫、海野龍英
2班（昔遊び）= 内田たみ子、増金スミ子、古後健一、飯川泰郎、大澤貞男、黒本茂弘
わ本部 = 道満俊徳（団長・1班）芦田義和（1班・会計）渡邊佳視（2班・総務）南形徹（2班・広報）